

## 幕末に於ける支那經略論の發展とその性質（上）

向 居 淳 郎

我が國史に於ける海外經略の思想を顧るとき、朝鮮半島の經營についてはすでに古い歴史を見るけれども、支那或は東亞の經綸が國民の意識に上るに至つたのはそれ程古いとは云へない。今日窺ひ得る史料の範圍内では支那大陸の經綸について明瞭な抱負をもつたのは豊太閤を以て先驅とするであらう。即ち豊臣秀吉が文祿の役未だ酣なる頃、すでに大明國を席捲し了へたかの概を以て之が經綸について考慮を廻らし、北京への遷都、大唐關白の任命など日本の政治組織の大陸移植を計畫してゐたのは周知の事實である。

しかし斯かる壯大な遠略思想も江戸時代の鎖國が進むにつれて、漸次朽廢して行つた觀がある。かの徳川三代將軍家光には明朝遣臣の要請に基いて支那侵略の雄圖があり、御三家の大名も之に賛意を表した程であるが、それは全く實行に移されないで終つた。更に加賀の松雲公前田綱紀に至つては秀吉が關白秀次に送つた支那經綸に關する書狀に「豊太閤三國處置太早計」なる標題を附して之を秘藏したけれども、松雲公自身どれだけ支那問題に對して造詣があつ

たかは傳ふるところがない。

斯様な秀吉、家光、綱紀、三者の支那問題に對する態度を見れば、それはたゞ個人的好尙を表はしてゐるのではなくして、その時代の裡に海外進取思想の後退の跡が偲ばれるであらう。その後退は云ふまでもなく國內に於ける封建制度の進行と相表裏するものであつて、封建制度の進行と共に海外に對する企業的 spirit の發動は抑止され、従つて海外問題は封建的將軍、諸侯の手から離脱しなければならなかつたわけである。

されば豊太閤の海外進取思想はその精神を基礎にした所の發展的思想を期待し得ず、後にこの種思想の發生する場合、直接の地盤たる事が出来なかつた。支那經綸の思想は豊公の時代を遠く距つた幕末の時代に至つて新たに發足するが、その思想の出現を促がした刺戟は國內にあつたのではなくして海外から得たのである。即ち幕末の頃歐米諸國の東洋經略が我が國民に覺知されるに及んで、海外進取の問題は新たに考慮される事となつた。この場合その問題を取扱つたのはさきのやうな封建的諸侯ではなく、主として學者志士である。學者志士であるがためにはそれ等の論が自由奔放にして空想的雄志に富むものがあるのは當然であらう。

而してその進取論の最初に來た形態としては、幕末の我が國が先づ接觸したのは露國の勢力であつたから、これが對抗策として北海方面の經略が主張せられた。本多利明の經世祕策、西域物語や土生熊五郎の整不恤緯がカムチャツカ、唐太方面の經營を説いてゐるのはそれである。

然し北方よりする露國に次で南方よりは英國の勢力が波及して來たから、我が進取論もこれに對應して北海並に南

洋の經略が次に考慮されるやうになつた。佐藤信淵の防海策は明らかにこの二方面の經略を説いてゐる。なほ豊後日出藩の儒者帆足萬里の東瀆夫論も北方の邊防を嚴にすると共に南方は呂宋を攻略すべきを云つており、その教を受けた豊前中津藩の儒者野本白岩がまた著す所の海防策に於て北海及び南洋への進取經略を説いてゐるのも、何れも英露兩勢力との拮抗を意識したものと云ふ事が出来る。蓋し野本白岩の海防策についてはあまり世に知られてゐないが、この著は白岩が嘉永三年の頃水戸烈公に建議せんがために編述したと傳へられるもので、その説く遠略の方向は西南は安南、呂宋、臺灣の諸島を經略し、北は蝦夷、唐太に諸侯を封じて國土の開拓に當らしめ、進んでは亞墨利加の西岸までも略取すべしと云ふにあり、邊陲の地にある儒者にして雄略大志を恣にしてゐるのは偉とするに足りやう。

斯様にして幕末に於ける海外經略論は先づ最初には北海方面の經略、次には北海南洋兩方面の經略が説かれたが、斯かる機運の裡にも第三の形態として來たものは本論の説かんとする支那經略論である。この場合支那とは嚴密に支那本土のみを指してゐるのではなく、漠然と支那本土を中心として地方、或は當時清朝勢力の及んでゐた地方を表はしてゐる。斯かる意味の支那を對象とする進取經略論は數ふれば幕末時代に於て決して少いとは云へない。而もそれ等の論はさきの北海或は南洋方面の經略論と比較するなれば、常に經略の對象地に變化があるのみならず、經略の意味、方法などに於て性質上の發展を來してゐると思ふ。後に明治維新以來大陸政策の起るのは斯かる思想の發展を以て精神的苗床としてゐること、疑を容れぬであらう。

本論は幕末の支那經略論についてなるべく數多くの論説を採り入れ、その性質を究明せんとするが、從來研究のあ

るものは説明を簡約にし、未だ研究の及ばなかつた點について主力を注ぐ事にした。もとよりこれ純粹な歴史的研究を意圖したものであるけれども、しかしまたこれによつて目下大陸問題の解決に直面してゐる日本の姿を理解するの一助にしようとする意もないではない。

## 二

さて幕末に於ける支那經略論は人も知る如く佐藤信淵に發してゐる。しかし信淵の支那に關する思想は時代の推移と共に顯著な變轉を遂げたものである事を看過してはならない。文化五年に著はした防海策、文政六年の宇内混同秘策、嘉永二年の存華挫狄論を比較對照して見るなれば、その間には思想變移の跡を見出し得るであらう。

先づ防海策を取り上げて見るにこの書は英露兩國に對する國防論を主として論じたものであるが、その中にはまた支那に對する策論あり、それは一種の恐清論とも名付くべきものが存してゐる。

大清國の強大にして密邇なる、萬一狡猾の王の出ることありて兼併の志を興さば、其患の大なることたゞに魯西亞の比すべき者ならんや、故に此大清國は卑辭厚聘を費しても與國となして交易を通じ、以て互市の大利を收めんこと、今の世の要務なり。

これ清國に侵略の野心生すべきを憂へ、それが警戒策を講ずる必要あるを説いたものである。斯かる恐清論は林子平等などにも見られるもので、さして珍らしい譯ではないが、信淵に於ては後の思想と對照して見れば興味少くない。

防海策の後ち宇内混同秘策に至つては信淵の支那思想は急轉回を示した。この書、名は宇内混同であるけれども、實際は殆んど支那經略論に終始せるもので、その實行方略として著者は「皇國より攻取り易き土地は支那國の滿洲より取り易きはなし」と述べ、先づ滿洲を攻め取り朝鮮侵入の別軍と共に直に燕京を衝き、それよりして西伐南征、遂に支那全土を席捲するの道を説いてゐる。幕末に於ける支那經略論また滿韓經略論の提唱は實にこの宇内混同秘策を先蹤として誤る所がない。

蓋し防海策に於ける恐清論からして宇内混同秘策に於ける征清論に變轉したのは何故であるか、その理由、動機は明らかでないが、防海策に於ける北海南洋への積極的進取論がその精神を擴充して、指向する對象を支那に專注するなれば其處に宇内混同秘策の征清論が成立するわけである。

然るに斯様な信淵の思想も嘉永二年の存華挫狄論に至つては再び動搖せざるを得なかつた。それは疑ひもなく東亞政狀の變化に基くものであつて、即ち阿片戰爭こそは信淵の思想に革新の機を與へたものである。されば存華挫狄論は阿片戰爭に於ける清軍の敗衄を憂へて、

清國若し此の敗衄失地の恥辱に憤を發し、君臣其心力を合一にし、膽を嘗め薪に臥し能く勉強して武備を精銳にし、滿漢の子弟を撰びて讐を復するの義師を起し、蠻虜を逐攘して侵地を恢復することを得ば、翹に中華の汚穢を雪むるの勳功のみならず、永く東洋諸國の大慶なり、古人有言曰唇亡齒寒と、自今以後清國益式徹して振ふこと能はざるに至りては、西夷貪悍無飽、禍恐くは本邦に鐘まらん、可不慮哉、是を以愚老竊に清國の復び興りて、

永く本邦の西屏たらんことを欲す(存華挫狄論序)

と云ひ、清國衰微すれば我が國危く、清國復興すれば我國また安泰ならん事を説いて清國の保全論に及んでゐる。この論説には西洋諸國の東洋侵略に對する日支兩國の利害關係の一致が考へられておる事は注目すべきであらう。従つて信淵の清國保全論はまた日支提携の論と稱しても差支ない。

斯様にして信淵の思想が恐清論から出發して、次にはそれと全く反對な征清論に移り、更に進んでは恐清、征清の何れの立場をも止揚して新たな日支提携論に轉じたこの三段階の思想的變遷はこれ一種の辯證法的發展とも名付くべきかと思ふ。斯かる發展的思想を展開せしめたところに信淵は確かに時代の先覺者と稱せられる所以があるであらう。

佐藤信淵の存華挫狄論の後ち數年にして我が國はペリーの來航と共に餘儀なく安政の開國となつたが、國論開鎖の兩論に分れて紛糾を續けた間にあつても、その國內的紛糾は支那大陸を對象とする進取經略論を藁符せしめるには至らなかつた。却つてこの種思想の進展する時期として安政以後は重要視せねばならぬ。これを安政年間について云へば眞木和泉守、島津齊彬、吉田松陰、橋本左内等何れも大陸政策を説く所があつた。中でも松陰が安政二年與治心氣齊先生寄獄舍問答に於て

僕窃爲國家、思今之策、旣與魯墨和、決不可自我生事、宜嚴章程、謹約束、不令其至驕悍、乘間收滿洲而逼魯、來朝鮮而窺清、取南洲而襲印度、三者、當擇其易爲者而爲之、是天下萬世可繼之業也。

と云つてゐるのはその論極めて大まかな進取論であるが、その中には清國經略の企圖ある事を見るであらう。同様の

進取論がなほ安政二年與來原良三書や同三年復久坂支端書にも見えてゐるが一々列挙しない。

斯様な松陰の進取論はその負ふ所の思想系統何れにあつたか。松陰は佐藤信淵の西洋列國史略や帆足萬里の東瀛夫論を讀んだ事實があるが、この方面に於て強く影響を蒙つたのは信淵の思想であつたらう。尤も松陰自らは幽室文稿の中に於て

余幼時、讀<sub>二</sub>百祐西洋列國史略所<sub>レ</sub>論、混同四海之策<sub>二</sub>、昔<sub>二</sub>其雄偉<sub>一</sub>而嫌<sub>二</sub>其夸誕<sub>一</sub>、未<sub>二</sub>深服<sub>二</sub>其爲<sub>レ</sub>人、と云つてゐるが、松陰の海外進取論の大膽雄偉なる點は信淵に最も近似すると云はねばならない。

而も松陰のこの種の論策が現れる事情の裡には外は清國に於ける洪秀全の太平天國の亂の動靜も閑却し得ぬであらう。安政二年四月松陰が家兄に贈る獄是帖には我が國策として「取易き朝鮮滿洲支那を切り隨へ」るべきを論じ、而して國內にあつて「相征し相伐する事」を大禁物となし

豊太閤程の雄才にてさへ惜哉天下分争の日に生れ候て神州の撥亂に手間取候故遂に明國手に入らずして歿せられ候況や今國內に事起り候ては外國へ手はのび不申大機を失ひ洪秀泉が清國を僞定し朝鮮も滿洲も隨從して彼より先に我鬪を款き候はゞ大遺憾不過之候

と云つてゐる。松陰は別に清國咸豐亂記の著述がある事によつても知られる如く太平天國の亂の動向に對して警戒を怠らなかつた形跡あり、斯かる事情がまた松陰をして清國經略の急務なるを痛感せしめた一因と考へられる。

清國に於ける太平天國の亂はその進行中に英佛軍の北京侵入をも招徠したが、之等極東政局の變動は我が國識者の

支那觀を改變せしめ、且又日本が何をなすべきかについての自覺を促す上に寄與した所は少くない。攘夷論者として有名な眞木和泉守は萬延二年三月野宮定功卿に上つた書に於て

近來夷狄ども逆焰盛んに相成、既に去る申八月清國に打入北京を追落し候由、畢竟は清國衰弱にて個様にも至り候哉に被存候へども、夷狄どもの強盛は是にても被察候事に御座候、方今の勢にて相考候に神州も如何相成可申哉誠に危き様に相見え申候

と云つて東亞政情の變化に警戒してゐるが、文久三年薩摩の西郷隆盛に贈つた信書には

全體兩間之勢三百年已前とも違ひ、西洋夷賊萬里の濤を涉候て諸國呑噬仕候世界に相成候ては皇國も彌以平城已前に復し朝鮮滿清は勿論南海諸島一般に我之指揮に令從不申候ては國威を四方に輝候事相成不<sub>レ</sub>申

と云つて朝鮮滿清を始め南海諸島の經略をも主張してゐるのは有名であらう。眞木和泉守が安政元年に著す魁殿物語には滿洲朝鮮を招撫して我が藩屏となすと共に、更に進んでは「清國に使をやりて共に犄角して」西洋の夷狄を東洋の天地より驅逐せん事を説いて日支提携を論じてゐるが、この日支提携論より前述の滿清經略論に轉じた動機は長髮賊の亂、英佛軍の侵入によつて曝露せられた清國の積弱であつたに違ひない。眞木和泉守に於ける日支提携論と滿清經略論との二種策論の存在は佐藤信淵とも相似て興味深い所である。

思ふに眞木和泉守の滿清經略論の出る文久年間はこの種論策の續出する年である。即ち平野國臣は文久元年尊攘英斷錄に於て三韓征服より始めて宇内を席捲すべき事を説き、又文久三年の制蠻礎策に於ては日支提携を論ずる所あり、



更に勝海舟は文久三年に長州の木戸孝允、對馬の大島友之允に亞細亞各國の合従連衡を説いた（海舟日記）。これと共になほ逸してならないのは近江膳所藩士森祐信が文久三年に著す所の倣屢論に於て滿清の經略を論じたこと、及び備中松山藩の儒者山田方谷が文久年間及びその前後に互つて屢々征清論乃至滿韓經略論を説いたことである。之等を以て見れば文久年間こそは幕末時代を通じて對支策論の最高潮に達した時期と言ふ事が出来よう。こゝにはたゞ滿清經略論者としての森祐信、及び山田方谷に就いて説くことにする。これ森祐信の論説が從來殆んど全く世に知られてゐず、又山田方谷の思想についても從來の研究が不十分であるためである。

森祐信は膳所藩贊進義堂に於て經學、軍學を講じた學者であつて、慶應元年黨議に坐して處刑せられた膳所藩勤王家十一烈士中の指導的人物として著はれた志士である。勿論その志士としての活躍は膳所藩本多氏が譜代大名であつたためか、花々しい活動をなす事が出来なかつたが、しかし尋常一様の尊攘主義者ではなかつた。その著す所の倣屢論（永元願藏編、膳城烈士遺稿所收）を見れば國是を定むべき事を説く項に於て「或曰國家長計莫善於開國、又曰莫善於鎮國。此二者主一皆非也。臣請併此二者以定國家之長計」として滿清の經略が國家永遠の計なるべき事を論じてゐるのは、非凡の識見と遠大なる氣概とを想察せしめるものである。

その説く所を要約すれば滿清は曩に阿片の變あつて以來國內疲弊して今に英夷の控制を受けてゐるが、苟もその間英雄豪傑の崛起することなければ二十年を出でずして必ずや英國の手に落ちるであらう。綿邈四百餘州の地を擧げて悉く英夷に與へ、我れ漠然として傍觀してゐるのは痛惜に堪へない。宜しく仁義の師を派遣して之が經綸を圖るべき

である。又聞く所によれば今滿清には英王、忠王と稱するものが亂をなして數州の地を掠め人民爲に塗炭の禍を受け  
てゐるが、これ隣國の禍、霸王の資とも云ふべき好機であつて、之が經綸を憚る所あつてはならないと。蓋し祐信は  
早く大阪江戸に遊學し、又夷匪犯疆録や海國圖志を讀んでゐたから世界の形勢殊に阿片戰爭を中心とする東亞の形勢  
に通曉してゐたに違ひない。而して云ふ所の英王、忠王とは太平天國の重要人物英王陳玉成及び忠王李秀成を指すと  
思はれるものであつて、これは祐信が太平天國の動靜についても深い注意を向けてゐた事を示すものである。斯かる  
東亞政局の變動に對する認識こそ、發しては大膽な滿清經略論となつたのであらう。

しかし祐信の論は我が國が外夷の侵犯を受けて自國の存立さへも困難なる現狀を閑却してゐるのではない。外夷の  
侵略を攘斥すべき萬策竭きて、虜勢日に強き時は如何なる策を講ずべきか、その時の策略に就てまでも論及してゐる。  
敵屢論の「善<sub>ニ</sub>後圖」の項を見ればその時には伴つて英國に降り、然る後ち英國に説くに滿清經略の利を以てする。而  
して我れ自らその先驅となつて滿清に攻入り恩威併び行つて務めて人心の收攬を圖る。斯くして羽翼すでに成らば何  
時までも英國の驅使に甘んずべからず、滿清心服の卒を驅つて雄飛大伸すべく、その破竹席捲の勢を以てすれば印度  
は無血占領せらるべく「豈翹英夷之制而已乎哉、宇内一舉之機於此乎在矣」とするものである。祐信は早くより越後流  
の兵學を學び之を藩營邊義堂に於て教授してゐただけあつて、その滿清經略論は誠に奇正變化の略に富んでゐる。そ  
れは兎も角として纒か數萬石の微少の藩に仕へて祿高百石を食むに過ぎなかつた身であり乍ら、學殖の奥深きところ  
天下國家を論じては氣宇東亞の天地を併呑するの概あつたのは驚嘆の外はない。敵屢論はその末尾に於て「異國の何

處にもなき山櫻移してぞ見ん唐土の春」と詠じてゐるが、開國論鎖國論の紛糾せる最中に於て、その何れにも拘泥することなく東亞經綸の大計を案じてゐたのはひとり膳所藩に於てのみならず幕末時代を通じて時流に擡ん出る所ありとせられやう。この種思想の先覺者として茲に特筆する所以である。

斯様な森祐信の滿清經略論がその文久三年の著である徹展論にのみ限られてゐるに對し、山田方谷の説く進取經略論は數年の間に亙つて述べられ、その説く内容も年代的に變遷してゐる。その論説を紹介するには凡そ六箇の資料を擧げるであらう。それを年代順に説明すれば次の如くである。

先づ第一に擧ぐべきは國分胤之編の魚水實錄(堆六九〇頁)に掲げてある「方谷先生建白」である。その建白の要點は外國一條終に御和親來夏より交易も始り候由、此上は致方無御座との御意の通に奉存候、是も氣運の使然事と歎息の外は無御座候、乍去天下の勢は變通の術にては又如何様共相成可申、此上逆も正義は行はれ不申事に御座候へばすつぱり打替候て廣太の遠略を被遊御考此方より手を延し候方可然、已に墨國へは明春御使節被遣候由風説仕候、御尤の御事に奉存候へ共畢竟不得止して御應答の爲と奉存候、我より手を延し候ならば先第一唇齒の隣國たる清國へ御通路可有御座御事、此方へ御使節被遣候て同和親仕候はゞ可然左も無之候はゞ方今戰を好候大諸侯に被命、彼の屬國たる朝鮮滿洲臺灣等我に近き處より切取に被仰付候はゞ元より衰弱の清國終には我屬國と相成可申も難斗候、然る時は西洋とは御和親御座候ても又別段御大略と相成、士氣も一振可致(中略)乍然右御征伐と相成候はゞ御廟算容易不成儀右に付ては苦心相考候愚策も御座候時を得候はゞ乍不及、奉申上度奉存居候

であつて、その主旨とする所は外國への通交は遠隔の米國よりは近隣の清國に使節を遣はして和親を結ぶを可とし、清國若し諸かざる時は諸大藩に命じてその屬國滿洲朝鮮臺灣を攻略せしむべく、その經略を押し進めるなれば清國は遂に我が屬國とならんと云ふのである。これは方谷がその仕ふる備中松山藩主板倉勝靜の諮詢に答へて自らの抱懷する對外意見を上らんとしたもの、この時勝靜は寺社奉行の職にあつたらしい。この建白には全く年月を缺いてゐるが、右の文中に「外國の一條終に御和親來夏より交易も始り候由」とか、「已に墨國へは明春御使節被遣候由」とか云つてゐるのは實際の史實に徴すれば、安政六年六月に於ける五箇國貿易の開始や、翌萬延元年正月に於ける遣米使節の派遣を意味すること明かであるから、この建白は安政六年春のもの、更に云へば板倉勝靜が同年二月二日寺社奉行を免ぜられる直前のものと推測して差支ない。安政五、六年の頃と云へば條約締結の問題から東江戸、東西の間に確執を生じ、季世朋黨の禍を見んとした時、右の「方谷先生建白」の前文にはこの形勢に對處して古今黨議の禍及び其の禍を銷する所以の方法が具陳せられてゐるが、それと共に國策の大轉換を圖つて積極的な海外遠略を力説してゐるのはその視野の廣濶を示すものである。從來山田方谷に關する研究は少くないが、寡聞のためか、方谷がすでに安政六年に支那經略の壮志を抱いてゐた事を注意したものあるを聞かない。その事は方谷の思想を知る上にも、又幕末に於ける支那經略論の發展を考へる上にも見逃してならぬ重要な事であらう。

次に第二の資料としては方谷が進督學に宛てた手簡である。進督學とは當時備中松山の藩學有終館の學頭であつた進昌一郎を指すが、この方谷の手簡は嘗て山田方谷先生年譜を編纂せられた山田準氏が近年に於て同藩林富太郎の遺

族の家より之を發見せられた。この手簡によれば日本の現狀は「内守は逆も不相成外略の外無之」とし、外略の主要は先づ朝鮮征伐より始め東北は滿洲山丹を一掃し、北蝦夷へ連ねて露國の侵入を阻止すべく、西方は支那の中登萊の地を割取し、南西は臺灣琉球の經略を圖り、更に南方の要地、新荷蘭や「ヲ、スタラリ」地方の三四島をも經略して歐米諸國の來侵を挫かねばならぬとしてゐる。その中でも征清の方略としては

滿洲朝鮮登萊臺灣之地は清國の屬境に候間一先清を御使節被遣、當今宇宙之形勢此儘にては外夷之物と相成可申、我と其國とは唇齒之國に候處、近來其國之有様にては逆も支那地を保候事は難成と被存、若然ル時ハ其禍終ニ我ニ及可申候間、先當分其方之屬國滿洲其外右之地方丈ハ我に讓與へ可申左も相成候へ、我より警衛致候而其國之爲ニも可相成、

と丁寧に告諭し若し不承引の場合は「此節扼腕思戰候水戸越前兩肥長州等の大藩」に命じて征伐せしめんと云つてゐる。その外朝鮮に對しても同國は清の屬國とは云へ、一王國であり、我が國とも由緒深い國であるから、一徹告諭の上、不服の場合は軍勢を差向けんと説く。而してこれに就て清國へ遣すべき國書の擬作を進昌一郎に依頼し、又朝鮮への分を林富太郎に製作せしめんとしたのが本手簡の用件とも云ふべきものであつた。

この手簡の宛名は進督學座右とあり、日付はたゞ四月十六日とあるのみで年號を缺いてゐるが、進昌一郎が有終館學頭であつたのは安政三年より文久元年に及んでゐるから、その期間のものであるに相違なく、それにこの手簡は林富太郎が安政五年十二月有終館學頭になつて間もない頃のものと覺しき節があるから、これは安政六年四月の書狀と

せられるであらう。なほこの書簡に見ゆる清國經綸の論が前掲の「方谷先生建白」と近似してゐる點、また手簡中に「内守は逆も不相成」とか、「此節扼腕思戰候水戸越前兩肥長州等の大藩」とか云ふ國內の政治情勢を考慮に入れても、安政六年の手簡と見て妥當を缺ぐとは思はれない。尤もこの手簡の發見者である山田準氏は「此事慶應元年ニ係ルカ」と註してゐられるが、慶應元年の頃には進昌一郎はまた藩學々頭に復してゐたけれども、その頃は幕府が長州再征の師を起してゐた時であるから、この手簡を慶應元年のものとしては文意通じないやうである。即ち本手簡はさきの方谷先生建白と共に安政六年頃の方谷の清國經綸の思想を窺はしむべき好個の資料であつて、而もこれを以てすれば實に清國のみならず、北海南洋方面をも含めた廣大な遠略策を窺ふ事が出来る。

方谷の清國經綸に關する論說として第三に注意すべきは方谷先生年譜や魚水實錄にも掲げられてゐるが、文久元年に於ける清國攻入の建議である。これには清國に於ける長髮賊の亂、またこの亂に乗じてなされた英佛軍の北京侵入の如き東亞政情が最も鮮明に表れてゐる。而してその國際政局の變動と共に方谷の思想にはまた變化の痕を見る事が出来る。即ちさきの安政六年の建白に於ては清國に使節を遣はして和親を圖り、諸かざる時に武力を用ひんとしたのであるが、文久元年の建議に於ては長髮賊の亂の好機に乗じて攻略を恣にせんとしたのである。その建議の重要部分を抄出するなれば

近來傳承仕候處清國大亂にて過半流賊の爲に奪はれ去秋に至北京は英佛の爲に陥り清主は滿洲に逃入候由に承り中華一圓無主之地に相成候趣に御座候て、何れにしても取り勝と申様の場に御座候間何卒我邦之御威武を以御征

伐被爲在御時節に奉存候間左右中軍三手に御分被遊左軍は南海より臺灣を攻取り、右軍は北海より朝鮮を攻取、中軍は東萊邊へ渡海、山東より攻入候様致度(中略)右一兩年も過候て彼地に英雄出候而一統平治仕候上は御手を被付難く相成可申、當時にてはいか程攻戰候とも定り候敵も無御座候、其内不宜時は引歸り候ても報復可致者も無之御安心之事に奉存候一日も後れ候而は萬代の遺憾に御座候間此段奉申上候

文久元年には板倉勝靜は寺社奉行に復任したので方谷は扈從してその顧問に備つてゐたが、この清國攻入の建議は方谷がその立場に於て幕府に建議すべく起案したもののやうである。けれども其事情願末は全く傳つてゐない。尤もこの建議が假令幕府當局者に通じたにしても、國力の現状から見て實現性の乏しいものであつた事は深く追窮するまでもなからう。

方谷の遠略思想の第四の資料としては、なほ魚水實錄(坤六八四頁)の「薩藩の取扱方」と題する中に臺灣征討の意見がある。これは文久二年四月島津久光の上京、浪士鎮撫の事によつて頗に盛名を趨せた薩州藩をして進んで南方臺灣諸島を征討せしめんとするもので、同年六月藩公への上書と見える。藩公板倉勝靜はこの年三月老中に任じ、外國事務を管してゐた際である。しかし方谷は薩藩の臺灣征伐を以て、かの慶長年間に於ける琉球征伐程に容易に實現するとは思つてゐなかつたのであらう。さればこの臺灣征伐を説くに當つて「乍去往年の琉球征伐とは違不殘切取には難爲致候半か」と云つてゐるし、また「尤此一舉は事跡不容易事に御座候間御尋に従ひ又々可奉申上候」と慎重を期してゐる。誠にその征台の學は速かに之を決行するには、内外の情勢を考ふれば事態容易ならざるものであつたに違ひ

なり。

さり乍ら方谷の遠略思想は何等かの形で之を具體化するべき機會を有ち得なかつたのではない。文久三年の頃對馬藩の老臣大島友之允が方谷に語るに朝鮮貿易の杜絶以來一藩の財政窮乏せるの狀況を以てするや、方谷は之に朝鮮經略を勸めて、爲めに征韓の方略部署起草し、その方略としては宗氏先鋒となり薩長等の諸藩をして之に繼がしむるにあつたと云ふ。方谷先生年譜に掲げてあるこの征韓論は方谷の遠略思想を見るべき第五の資料である。この方谷の征韓勸説に基き友之允は之を藩に謀り更に幕府に請ふたので、幕府は宗氏に命じて朝鮮の事情を探らしめたと傳へられるから、斯かる遠略策は漸次實行の段階に向つたものと云へやう。當時老中であつた板倉勝靜が元治元年勝海舟に命じて、「朝鮮國之體探索」のため對馬に赴かしめんとしたのもこの方谷の征韓論と無關係であつたとは思へない。但し間もなく板倉勝靜は老中を辭したので方谷の征韓の議はこれ以上具體化するの道を閉ざされねばならなかつた。然るに慶應三年に至り幕府に於ては朝鮮に使節派遣の計畫あり、時に板倉勝靜は老中に復任してゐたから謀臣山田方谷はその遣使に際して北海開拓の意見書を上り、それに關聯して支那問題を論じたのであつた。これを方谷の遠略思想を窺ふべき第六の資料とする。魚水實録によればその北海開拓意見書の説く所は

唐太より西北山丹滿洲地方我が北陸道の差向に當り一小海を隔候のみにして其風土も定て蝦夷に似たる事多かるべしと被存候然るに是迄蝦夷と交易致候而已にて我邦へは通し不申混沌未開の地多分可有之と被察候清國も衰弱故それ等に手及び申間敷、魯西亞よりは段々開拓いたし候へ共是以草創の事故行届申間敷候間、何卒相願候は北



陸に海軍を備へ商船を造り右滿洲地方へ渡航交易を盛にし、いまた開さる地は土人を教へ又者我邦人を遣し開拓いたし、其物産皆々我邦へ運輸いたし候様被成度事に奉存候

であつて、北陸山陰地方には佐渡と隱岐を根據地としてこゝに海軍を常備せしめる旁ら滿洲朝鮮地方への航海交易を盛ならしめる、而して更に進んでは

北方御開の儀幸に今般朝鮮へ御使被遣候事故朝鮮に於て右申談いたし候儀は勿論序に其御使を直に北京へ被遣清國と滿洲交易の條約を被爲結度奉存候、但清國に於て不承知の時は直に滿洲へ攻入一戰に可及應接にいたし可然と奉存候

と云つてゐる。これは滿韓の經略には經濟的關係を結ぶと共に軍事的實力を行使すべき事を説いたものに外ならぬ。斯かる滿韓の經略策も幕府の採用する所とはならず、やがて王政復古が成立したが、方谷が海外經略を説くに當つては經濟的方面に注意して來てゐるのは後にも説明する如く興味深い事である。元來方谷は備中松山藩の藩政に與つては財政經濟の改革に力を盡してゐたから幕府財政の困難なる現状に鑑み斯かる論説を出したのは尤もの事であらう。

斯様にして山田方谷の支那經略論は時代の推移と共に變化があり、内外情勢の移り變りと共に發展があつた。勿論安政六年の頃には朝鮮滿洲臺灣の經略より着手して清國に及ばんとし、次で又文久元年の頃には清國の混亂に乗じて朝鮮東萊臺灣の三方面より之が經略を斷行せんとしたものが、文久二年には臺灣の征討、文久三年には韓國經略、更に慶應三年頃に至つては滿韓地方の經略に終らんとしたのは規模の點から云へば必ずしも擴大したとは云へないが、

實現の可能性の點から云へば前者の空想的のものから一步進めて漸く堅實味を帯びて來たとせねばならぬ。

以上云ふ所から山田方谷が海外經略論史上幕末時代の掉尾を飾るにふさはしい經世家であつた事が知られるが、而も之を前にしては佐藤信淵の大陸經略論があり之を後にしては明治時代に於ける大陸政策の展開がある事を思ふ時、而山田方谷は兩者を思想上に於て連絡せしめる地位にあつたとして憚らないであらう。